

へ歸る時は、いつも夜の十一時。十二時で、原稿も手紙も書く事が出来ません。それに此の一週間は、電車に乗つてゐる僅かな時間の外は、全く讀書を廢してゐるやうな次第です。

十八日に芝の増上寺で御葬儀があります。私は接待掛の役割で、當日は朝の六時までに、お邸へまゐります。御埋棺を終るのは、多分夜の八時頃にもなりませうか。こんな次第で、雑誌の原稿×切時間たる月の中旬を、一向落ちつく折もなく過しましたので、とうとう「みづゑ」の間合はなかつたのです。

○
ウイルヤム・ナイト氏の『美の哲學』と題した上下二冊の中、下巻の「繪畫論」を抄譯しようと思つてゐるのです。極く平易な、要領を得た記述で、新説といふものでもありませんが『みづゑ』の讀者諸君に、多少とも参考になれば結構です。四月號から必ず「繪畫美學」と題して連載します。

○
赤阪の三會堂で『白樺』主催の展覽會があります。ロダンの彫刻も、實物が三個來てゐるそうですから、是非見に行きたいと思つてゐます、今日にもに行つて、感想を書いてさし上げたいのですが、時間の都合が悪いので、其れも出來かねます。

一寸お佗びと存じ、くだらぬ事を書いてしまひました。何うぞ悪しからず。(二月十六日)

下藤次郎氏の繪日記

故大下君は、至つて丹念な人で、あの忙がしい最中に、缺かきず日記をつけたり、紀行文を書いたりしてゐる、紀行文は歿後、遺稿として本誌に出したことがあるが、日記に至つては、繪ばかり、之れも粗末なナモ帖に、鉛筆で至極あつさり、スケッチがして、日附があるばかり、どうかすると、目を惹いた野外の植物などを、寫生した傍に、その名や、色彩を註してあることがあるが、その外は何も書いてないのが多い、ツマリ、人に見せるためでなく、自分一人の憶ひ出の種にしたのらしい、人物なども、同君には誰といふことが解つてゐて、他人が見ると解らぬ、その日記は十數冊あるが、こゝに三十九年四月の日記から、五枚ばかり切り取つて、寫眞版にして掲げて置く、もつと面白いのであるのだ、四月といふ月に重きを置いたので、こんなものが出來た。

非人情の記

幸雄

三

降りしきる雨の中を、心細そうな建さんを引張つて、無二無三に歩いた、今は菅笠の恥しさも、建さんの身體の心配も、よい加減にして、出來る丈元氣の出る様な話をしながら、歩いた。何だと問はれたら、河ですと答へ度い様な道を、幾度か倒れさ

うになりながら、只行く、村人がげん顔付で、見送る目付も、靄然と夢の様に霞む酒匂の谷も、建さんの得意の種だった、新しい桐の足駄が、慘憺たる有様となるのも、最早や關つて居られない、なんぼ夏の眞中だつて、濡鼠の儘では、そろ／＼寒くならざるを得ぬ、菅笠の御蔭で、背中の河は止つたけれど、生温い様な、肌寒い様な、何とも知れぬいやな心地——例へて見れば、冬の夜寝小便を失敬した時の様な心地——早く何處か一夜の宿りを得て、汚くても干いた衣物を、と心細い事を當にして、只歩む。

何時の間にか道了様の、第一の門まで来た、一寸休むで、澁茶をすゝる。建功は葉書を家へ書いて、心細さの一端を聊洩らした様子である、僕は休むだ家の主人に、明朝箱根へ超へ度いがねと相談を持ちかけた、相談は程なくまとまつたが、親爺漸く太雄山最乗寺の縁起由来を説き出した、先づ天狗様とお寺との關係から、言葉而起して、滔々數方言、權現様の御利益に信者天下に、普きまでに及むで、更に一轉我家の歴史沿革から、自分の親父の住むに到り、結局自分が此所に寺の檀家總代をして居ますと結んだ、斯様な山の中で、斯程な雄辯を聞かうとは思はなかつた、只惜しい事に、聲が悪い、安物の蓄音器の琵琶歌見たやうだつた。

此所に宿つてもよいのだが、隴を得て蜀を望むは、人の常とやら、理屈をつけて、今夜は一つ道了様に御籠しやうと出掛けた、一寸樂になると、僕の呑氣は直様主張を逞うする、左様な

らと、腰を立てたら、椽先の譬の据つた所に、衣服が濡れた爲め、大きなスタンプが二つ押されたは面白い、アラマアと女中が叫んだ、アラマアの勢力は山間の僻地にまで、及んで居る。

何時見ても深い感じのする所だ、一森々たる松の森は、萬年の碧を凝らして、眞黒になつて茂つて居る、太陽は最早灰色の雲の中の何所かに沈むてしまつたに相違ない、あたりは余程暗くなつて来た、チリン／＼と鳴つて時々白衣の道者が、青葉隠れに浮いて出て来る。

急に頭の前に、ガラ／＼／＼と雷が吼えた、吃驚しちまつた、非人情も吃驚するに差悶ばない怖かつた、芝居見物の僕等は、急に打たれた舞臺のピストルに驚いたと、云ふ體たらく、そして其ピストルの弾丸が入つて居るかも知れないとて、怖がつたのだ——雷は其儘止むだが、余韻が未だ消えやらぬ、亡者の様に道了權現の谷々に騒いで居る、氣味が素適に悪い。

最乗寺の玄關に立つて、今夜御籠りを願ひますと、青い頭をした坊主に頼んで、それから僕は家内安全の護摩を、建さんは身體健全のをあげる事にする、若いのに殊勝な事共と、御賞め下さるかも知れないが、實は護摩を上げなければ、宿めないと思はれたから、詮方なしにたく事にしたのだ、建さんは理屈をつける事の好きな人間で、自己の行動は、何時でも説明つきた、「ネエ、僕の親はね、常に僕の身體を計り心配して居るから、僕は、身體を丈夫にするのが最も親孝行だと思ふて居る、だか

ら僕は、身體健全の護摩を上げた」と、理屈を担ねる、成程建さんの言ひそうな事だと、感心して置く。

悪戯さうな小坊主に導かれて、からつとした室に通された、中央の大火鉢には、湯が沸いて居る、蒲團は押入の中にあらず、と云つて坊主は立去つた。念の爲め押入を開けて見ると中にあるく、いくらでもある、下の方には木の枕が行列して居る、無論寢巻も何も有つたものでない、こんな事なら、さつきの雄辯なおやぢの處に、泊ればよかつたと、後悔は例の通り先にならぬ、濡れたものを順次に火鉢で乾かして居ると、素適な飯が御大層な道具に載つて来た、先づ味噌汁は桶の中にあつて、杓がついて居る、其外椀と云ひ、箸と云ひ、古風を極めたものであつた、餘り面白さに僕は、寫生しやうかと思つたけれど、饑じさうな顔の建さんが、氣になつたから、早速やめて、箸を持つ、御酒がついて居る、見ると建さんは何か煩悶して居る様だ、僕は彼が御酒が好きなる事を知つて居るから、此の際酒に親まぬ我輩に氣兼ねはして居るもの、喉から出た手は、仲々おさへ難く、例の、身體健全親孝行主義の原則から、何か酒は飲めて、且飲み度いからではないと云ふ理屈を一生懸命に演繹しやうとする努力に、相違ないと、見當をつけた、面倒くさいから、平氣な知らぬ顔で、御精進のうまくない飯を呑むだ。寒い湯に、坊主と一所に入つて、兎も角も寝る事にする、例の押入から、數へきれない程の蒲團の、少しは清潔らしい感じのするのを、撰むで敷いた、異な臭がする、僕は蒲團のきたない程嫌なものはないが、仕方がないから、觀念して、濕つぽいシヤツなり横になつた。

建さんは、例によつて腹を出して居る、彼は二木博士の御弟子で、腹式呼吸の熱心な實行者で、且同時に其傳教者だ、少し出かけた腹が自分で釣つた鯉の様に、得意で得意で堪らない、

僕に會ふ度に直頼みもせぬのに、美しからぬ腹を見せる、そして「横隔膜は」とやり出す。

「幸さん！」そら来た

よい加減にあしらつて居る間に、建さんの深呼吸は、鼾聲に變つて来た、此方は無事に片付いたが、偕我輩は寝られない、——蚤が居る、我輩は一體近年流行の神經質と云ふものである程、ハイカラではない、けれども、飛だ親譲りて御母様の眠られない性分を、すつかり、頂戴した、まして蚤が居る、——蚤！僕は蚤には大部經驗を積むだ心算であつた。けれども、山の中に斯様な大勢な蚤が居やうとは、思はれなかつた、一高の自治療は、實に蚤の名産地と信じて居た、蟻位の大きさの蚤が、癩猛に居る、寢室の壘を叩いて、横からすかして見ると、美麗と思へる程飛び立つ、僕は診方なしに三ヶ年向陵生活を、失敬ながら、行李をのせる棚の上に寝た、落ちるといけないから、細引で、身體を結びつけた、友達は僕を神經過敏と笑ひながら平氣で床の上に蚤と同居して居る、我輩は彼等の神經過鈍を笑つて、天井に蜘蛛の巢を眺めて暮した。

僕は斯様に蚤の本場を踏むで来た老将だが、道了權現の一夜の蚤潰けには、實にく、閉口しちまつた、チクリと腋の下を刺す、チクリ股の中だ、チクリ背中 of 恰度手の届かぬ所、チクリ、頬べた、——何ぼ何だつて、顔を刺す奴があるかい、チクリ、足の指の俣——何處が痒いのだか、解らなくなる、チクリア——情ない、泣き度くなつた、家へは歸り度くなつた、建さんには、内密だか實は泣顔をしながら、若しや棚でもと見廻すと、何にもない、口惜しくなつて、飛起きた、ランプはぼんやり燈つてる、外には風の音、雨の音、少し落付いて居ると、「蚤を相手に夜を明すかな」と云ふ氣になつたから、非人情の教科書を復習を初めた。

建さんは、吞氣に寝て居る、きつと無神經に、相違ない。